

研究計画・目的：

本研究の目的は、わが国で一般的に認知されていないグローバル・サウス (Global South) 概念を援用しながら、グローバル資本主義段階における現代国際貿易ならびに地域貿易統合の特徴について考察を深めることである。グローバル・サウス概念とは“多様”な資本主義の一段階であるグローバル資本主義を含意する概念のみならず、グローバルな「支配」および「抵抗」の諸様式によって特徴づけられる概念である。さらに搾取・疎外・周辺化を経験するあらゆる被支配集団と「抵抗する」諸集団・政治的アクターを示す概念と規定され得る。国際貿易の不等価交換を通じて強化されてきたかつての「南北問題」における「北」や「南」、もしくは中心（センター）と周辺（ペリフェリー）という区分は、グローバル資本主義段階においては“地理的カテゴリー”からますます“社会的カテゴリー”になりつつある。したがって、本研究の目的は、グローバル・サウス概念から見える現代国際貿易の現状と特徴を考察し、この概念を用いることで可視化される視座から諸課題を明らかにすることである。

研究活動：

本研究では具体的に富める「北」と貧しい「南」といった静態的構図では捉えられない、国境を越えて拡散する“新たな社会的ヒエラルキー”や不平等・格差の諸形態、その生成メカニズムの論理を 1980 年代以降の新自由主義政策の展開ならびにその否定的な諸影響と交錯させつつ検討した。かかる問題意識の下、グローバル・ノース (Global North) とグローバル・サウスの「結節点」であるスペイン (PIIGS と呼ばれる EU 内後進国) の国立科学研究高等評議会人文社会科学センターの訪問研究者として研究活動を遂行した。

研究成果：

第一に、グローバル・サウス概念の定義に関する研究を遂行し、以下の論点が明らかになった。すなわち同概念は多様であり、解釈の幅も多層的である。第一義的には旧植民地のアジア・アフリカ・ラテンアメリカ地域などを指しており、(欧米的な経済基準で計った場合に) 一般的に途上国や新興国と呼ばれている。これは伝統的な「南」、旧「第三世界」を表す地理空間的カテゴリーによる定義である。他方、グローバル市場に経済的に参加し、居住国・地域を超えて利益を得ている人々と、そこから排除されたり疎外されたりする人々を区別する社会的カテゴリーを包含する概念として再定義する議論もある。同定義では伝統的な「北」の富裕国の内部にも「南」と同様な貧しい場所・空間・階層が出現しており、同時に伝統的な「南」(たとえば東・東南アジアやラテンアメリカ、アフリカの一部) の内部にも「北」と同様な裕福な場所・空間・階層が出現している今日の世界を俯瞰することができる。すなわち、「南」の社会的カテゴリーに押し込められる人々は国籍や居住地を問わず「グローバル」に拡散している。グローバル・サウス概念が登場する背景は、経済学者の D. ハーヴェイや S. サッセンなども認識しているが、新自由主義を生み出してきた 20 世紀型資本主義(国民国家を前提にした「フォード主義的・ケインズ主義的」資本主義)の限界および冷戦終結を契機にした新自由主義型グローバル経済循環の加速度的進行がある。このグローバル経済循環の展開下で、たとえば、環境悪化、世界的規模での格差拡大、

不法移民・難民増大、多様な形態の国境を超える犯罪、コモンス—保健、水、輸送、エネルギー、知識、種子、土地など—の収奪といった多くの越境型問題群が噴出してきた。これらの現象は国家と社会の安全保障のみならず、リージョナルやグローバル社会のリスクとして認識されるようになった。世界的規模で展開するアグリビジネス戦略や投機的ビジネスは、周縁化された生活の様々な領域で直接影響を及ぼしている。グローバル化の影響は不均等にはあるが、リージョナル空間のみならずローカル空間にまで深く浸透してきた。そして、新自由主義型グローバル化の影響は「南」だけではなく、「北」にも同様に広がっている。多国籍企業の経済権力と支配（市場の寡占化・独占化）の拡大、そしてグローバル生産システムの展開（グローバル・サプライチェーンの最適化）により、グローバルかつナショナルに富の激しい集中が生じ、超富裕層とその他の諸階層とのギャップは人類史上で最も拡大している。

新自由主義型グローバル化はグローバル・ノースとグローバル・サウスとの間に、また一国内においても急激な社会的不平等を生みだしている。注目すべきは、「南」と同様な貧しい場所は「北」にも多数存在し、同時に「南」のエスタブリッシュメント層が富を蓄積している多くの富裕地帯が「南」にもある。グローバル化の下、国境を越えて組織され拡散される新たな社会的ヒエラルキーや不平等の諸形態が出現している。こうした社会的ヒエラルキーと不平等のグローバルな存在は、従来の「途上国」や「南」といった概念では捉えきれなくなっている。グローバル化時代の「南」は、かつての「南」ではなくグローバル・サウスである。さらに言えば、「発展途上」という用語も、「先進」と「途上」の二項対立も有効性を消失している。「途上」は欧米中心の経済主義的概念の反映であり、また、国家中心的な二分法的発想も免れていない。「途上国」や「南」といった概念では今日の世界を認識する枠組みとしては不十分であることは明確である。社会的ヒエラルキーと不平等のグローバルな存在は、従来の「途上国」や「南」といった概念では捉えきれない。グローバル化時代の「南」は、かつての「南」ではなくグローバル・サウスである。グローバル・サウス概念はグローバル資本主義の重要な部分を構成している。センター（中心）とペリフェリー（周縁）の間の、そして「北」と「南」との区別・区分が不鮮明になっている事実がその背景にある。

以上の研究により、グローバル化のもとで、センターとペリフェリー、「北」と「南」は地理的カテゴリーというよりも社会的カテゴリーとなっており、それはトランスナショナルな社会構造内の「位置」を意味することが明らかになった。

本研究成果の第二は、グローバル・サウスはグローバルな支配と抵抗の様式によって特徴づけられる理論的ルーツを持つ概念であることが明らかになった。そして、新自由主義型グローバル化の下で搾取や疎外や周辺化といった共通の経験を有するあらゆる被支配集団と「抵抗する」諸集団を包含する政治的アクターを示す概念でもある。たとえば、グローバル・サウスでは今次のパンデミック以前から恒常的に感染症リスクを抱えていた。だが、公衆衛生インフラ整備は進まず、保健医療システムは脆弱であり続けた。財政上の制約要因もあるが、グローバル・サウスでは公的医療支出より対外債務返済に多額の国内財源が費やされてきた。加えて、環境破壊や災害リスクに関しては熱狂的資源採掘や農地収奪といった問題が集中的に発生している。2022年秋もハリケーン・イアンがカリブ海やフ

ロリダ半島に上陸し、暴風雨による被害が拡大した。熱帯低気圧は気候変動による海面上昇の影響を受けやすく、将来的に雨量規模もさらに膨張するとの予測もある。国際 NGO オックスファム『炭素の不平等』報告書が指摘するように過去 25 年間、世界人口の最も裕福な上位 10%が排出した累積二酸化炭素量は全体の半分以上を占める。脆弱な最貧層が排出した二酸化炭素量は僅少であるが、最貧層は公的支援も受けずに気候変動の影響を受け続ける。グローバル・サウスでは干ばつ、ハリケーン、洪水、自然災害リスクに対応し、被害軽減のためのリソースを持たない。他方、グローバル・ノースでは ESG 投資の動きはあるものの化石燃料産業への資金提供や投資を継続中である。さらに国際労働力移動に関しては、伝統的な「北」では、労働力調達の流れを調節する門番的機能を強化し、一定期間の資本蓄積やシステム合理化の必要性に応じて移民流入を促進したり、制限したりしている。この門番的機能は国境軍事化、監視・統制強化、国境警備隊の増強によって補完される。他方で、グローバル・サウスでは農村経済・コミュニティ構造の弱化的大きな流れの中、小規模家族農業や小規模土地所有農家の経営が立ち行かなくなり、契約農家化の促進、廃業・離農の増加、都市部への求職移民、インフォーマル部門（麻薬経済含む）への流入、そして大半は脆弱な労働環境下で低賃金労働者になるべく越境移民となっている。移民排出の複雑な力学は一層多様化した。

しかし、たとえば、合衆国側（トランプ前政権のみならずバイデン現政権下でも）は移民発生の原因を移民送出国の暴力、麻薬、貧困、経済的機会の欠如に求めている。麻薬カルテルや準軍事組織などによる物理的な暴力は移民発生のも一般的かつ直接的要因であるが、移民現象の包括的把握のためには移民排出の力学の一構成要素として自由貿易協定の存在が重要である。合衆国が中米カリブ諸国と締結してきた貿易協定は農村から都市部への大規模移住や越境移民化を促し、農村コミュニティや農村経済に直接的影響を与えてきたからである。さらに越境移民現象はグローバル・サウスの概念に関して重要な問題提起をしている。合衆国を主とする伝統的な「北」では低賃金で労働集約的な仕事に従事する労働力の必要性に応じて移民流入を促進したり、あるいは景気動向に応じて制限したりしていることで米国の労働力市場は市民（citizens）—非市民（non-citizens）、自国民労働者（native workers）—移民労働者（immigrant）、さらにジェンダー、エスニシティ、人種の違いに基づいた細分化が進んでいる。移民労働者の多くは不安定で、好条件とは言えない労働環境に置かれており、グローバル・ノース内部でも「グローバル・サウス化」している人々が溢れている。

今後の展望、教育への効果：

今後の展望としては、グローバル・サウスは「不平等を伴って複合的発展」するグローバル・サウスであることが明らかになったため、今後は従来の「途上国」と「先進国」、また「南」と「北」といった区分は再考されなければならない。「途上国」や「南」というカテゴリーは現状を十分に反映しきれていない。今後ますます、グローバル・サウ斯的分析視角が重要かつ前提となる。新自由主義型グローバル化の展開の重層性と複合性に対応して、グローバル・サウスの重層性と複合性を認識し分析することが極めて重要である。グローバル・サウス概念は、国民国家中心の分析から離れ、新たな段階に向かうグローバル

資本主義の推進力としての多国籍資本と多国籍化する国家によるグローバル世界の再編成の現状と行方を考察するための有効な理論的枠組みであるといえる。むしろこれはナショナル・レベルの諸現象や国家間のダイナミックな分析を放棄することではない。むしろ、「ローカル/ナショナル/リージョナル/グローバル」の連結関係のなかで、ナショナル・レベル（＝国民国家）での多国籍企業（＝グローバル市場）と市民社会（＝抵抗するグローバル・サウス）の変容する相互関係を考察することが必要になる。

最後に教育への効果としては、本研究により新自由主義型グローバリゼーションや地域貿易統合に対する批判的分析視点を教育上、広く学生へ提供することが可能となった。また、“抵抗するグローバル・サウス”として世界的規模で頻出する多様で複雑な政治的社会的諸アクターによる対抗戦略を着想するための方法論・理論的枠組みを教育的に教授することが可能となった。